Bible + Pop Culture
（2020年4月号掲載 | 日本語訳）
[元ページはこちら]

「布の記憶」

永井ゆずり

Donjya. Image courtesy of AMUSE MUSEUM

部屋の片隅に何かの気配

そこらじゅうについた生活のしみ
使い古され色あせた布は所々原形をとどめていない
荒い縫い目で継ぎ合わされた、幾重にも重なるはぎれ
裂け目からはみ出す苧屑

汗、垢、涙、尿…生活の全てがその布には染み込んでいた

およそ120年ほど前まで、本州のどん詰まり、最北端に位置する
青森では寒さ厳しい夜、ドンジャという着物型の掛け布団の
下、家族は裸で寝て体温を分けあい寒さを凌いだ。

強烈なほどの人々の記憶と時間の蓄積…
それはあまりにも個人的で
あまりにも親密で
何か見てはいけないものを目にしているようで
同時に私の全存在を要求してくるような迫力で
目をそらす事ができなかった。

襤褸布の文化

東北地方の最も奥まった農村地方でぼろ布の文化は生まれた。それは必要に迫られた人々の暮らしの根底から湧き上がったものだ。日本（同じく世界の多くの場所）で合成繊維が織物産業の主戦力になる以前、人々は主に絹・木綿・その他の植物繊維から糸をとり、衣服を作っていた。

絹は上流階級のものとされていた江戸の時代、農民の着物は制限され、加えて北の凍てつく寒さの中、木綿は育たなかった。暖かい地方からの交易路もまだ確されておらず、唯一農民の身近に残された繊維は麻などであった。[1]

---

[1] 小出由紀子　都築響一（2009）. BORO― つぎ、はぎ、いかす。青森のぼろ布文化　アスペクト

彼らは自分たちの手で麻を育て、布へと織り上げた。まずは着物へと仕立てられ、ほつれれば幾度もつぎはぎをされ、大切に使われた。やがて着物は掛け布団や敷布団、前掛けやその他の生活の道具に姿を変え、さらにはおむつとして、または女性の生理帯に使われ、最後は灰となって土へと還っていった。このようにして布は時には三代、四代と世代を超えて受け継がれ、こうしてぼろ布文化は生まれた。[2]

Japanese village buried among snow. Photo courtesy of Shutterstock

織り込まれた記憶

Boro. Image courtesy of AMUSE MUSEUM

持ち主が去ってからもう何十年も経つというのに、そのドンジャには人の営みの記憶が織り込まれ、物理的な領域を超えた重さを抱えているようだった。

それは青森の農村地方で生きていた人々の証。経済的、社会的、政治的、そして地理的なしわ寄せを一気に負う事になってしまった村で生きていくには、どれほど心を強く持たねばならなかった事だろう。家族が寝静まった後、女性は糸を績み、織り、針仕事をした。彼女たちの切なさを布は無言で受け止めていたのかもしれない。

「台所で泣くと『女は台所で泣くものではないわ』と姑から言われ、夜、寝所で泣くと『うるさい』と夫が怒る。」[3]

何千にまで及ぶであろう縫い目は女たちの涙の分身であり、家族への祈りだったのではなかろうか。衣に包まれ、守られますようにと。

その想いは蒸発する事なく、ただただ布に留まり続けていた。

これだけの記憶を留めながら、重さを持たずにいられようか。

通りすがる者の足を止める魔力を持たずにいられようか。

見える世界と見えない世界のどちらに属するものを観ているのか、もはや区別がつかなかった。

---

[2] 安間信裕（2018）. 自然布: 美しい日本の布　キラジェンヌ

[3] 田中忠三郎（2009）物には心がある。消えゆく生活道具と作り手の思いに魅せられた人生　アミューズエデュテインメント

遠く青森の農村をさまよっていた意識がようやく自分の身体へと戻る。

今日は何を着ていただろうか。肌の感触を通して確かめる。

シャツは薄いプラスチックのように軽かった。

この綿布、地とのかつてのつながりを記憶しているのだろうか。

繊維から布になるまで、人の手の温もりにどれだけ触れただろうか。

もし今日私が死んだなら、このプラスチックのような感触が

私の魂に永遠に記憶されてしまうかもしれない…

ドンジャの前で恥じ入る私は、いっそのこと裸になった方が良い気がした。

ぼろの美

民藝運動の父である柳宗悦は、美の探究過程で、仏教は遥か昔から美の本質を捉えていたことに着目した。

「真の美とは美と醜の境界線が引かれていない所にあり、『美と醜以前』の領域、あるいは『美と醜が分け隔てられていない』状態に在る。」 [4]

真なる美は時に挑発的で
その場に居合わせた者の全存在を要求する。

無言で我々に問いかける、「己は我に対して開くのか、閉ざすのか」

こころ開く者は、聖なる地に立っていることに気づく。
あるいはそこから命の源泉へと繋がる道が開けるかもしれない。

---

[4] SOETSU, YANAGI. (1972). *UNKNOWN CRAFTSMAN: A JAPANESE INSIGHT INTO BEAUTY.* KODANSHA INTERNATIONAL.